

第7回「京都御苑ずきの御近所さん」
奈良県立大学名誉教授

西田正憲 様



■西田様は、京都御苑管理事務所に庭園科長として勤務された経験をお持ちです。役人から大学教授に転身された背景を教えてください。

病気が最大の原因です。阿蘇くじゅう国立公園在任中に発病して、全身麻痺で1年間は人工呼吸器をつけてベッドに寝たきりでした。ようやく人工呼吸器が外れて、リハビリを始めて1年後、やっと杖で歩けるかなというふうになりました。その時は、医師から、たぶん車いすでしか生活できないだろうと言われました。その頃、環境省の人事担当者と相談して、どのポストに社会復帰するかという問題になりました。復帰は早くしないと子どもが3人いるので経済的な問題があって、何とか普通の仕事と生活をしなければなりません。一日中座ってできることをやろうかと思っていました。実際にリハビリをしている時には、医師から「もう大した仕事はできないから、君のできる仕事を考えなさい」と言われました。例えば図面のトレースとか、色塗りとか、新聞の切り抜きとかです。実際にそういうことを真剣に考えました。復帰場所は、住宅と職場の通勤がしやすく、バリアフリーのところが希望でしたので、その条件にかなう岡山でした。やはり、2年間も病院生活をしたため、社会に戻ってきたら全然違っていました。病院でできていたことが、職場ではできないとかね。そんなことがいっぱいあって、1年間はほとんど車で職場に行き、座っているというだけでした。

ところが社会生活が一番リハビリになるというか、徐々に歩く力もついてきたのと、手指も使えるようになってきました。例えば弁当を食べるのも装具をつけていたのが、いつのまにか箸も使えるようになるし、字も普通に書けるようになりました。不自由でも結局は残っている機能で人間上手くやるんですね。こっちも欲が出てきて、自分でできることはもっとないのかと思いました。大した目的とか方法とか何にもなかったけど、瀬戸内海の資料をできるだけ集めてみることにしました。幸い車での出張が徐々にできるようになってきたので、各地の図書館に行って瀬戸内海に関する資料を集めました。2年目に当時、国立公園協会助成金というのがあって、その助成金をもらって資料収集をしていたら、瀬戸内海を過去の記録や本でいろいろ絶賛されていたということがわかってきて、どうい

ふうには絶賛されていたのかということ調べ始めました。しかし、瀬戸内海を絶賛した記録を集めてみようと思ったけど、最初のうちは、そう簡単に集めることができませんでした。外国の本も翻訳なんて20冊くらいしか集まらなかったし、日本人も日本風景論とか非常に有名なものしか集まらない。そうこうしているうちに外国の文献や原書は国際日本文化研究センターや横浜開港資料館というところにあることがわかりました。それから日本人の資料は日本紀行文集成や随筆集成とか、そういう旅行記とか随筆を集めた全集とかがあるということがわかってきました。それで、片っ端から見始めていった訳です。国立公園協会に毎年報告書を提出していると、大井道夫さんというOBの方が面白いことやっているなと関心を持ってくれました。その時、職場に「研究会」という組織をつくって研究助成金の受け皿にしていたのですが、研究会の座長を大学の一年先輩の白幡洋三郎氏（当時国際日本文化研究センター助教授）になってもらいました。そしたら白幡洋三郎氏が報告書を見て「これはきちっとまとめて、もうちょっと精緻に調べて学会で通せば博士号をとれるかもしれない」と言ってくれました。論文というものを全然考えてなかったけれど、それはすごい励みになりました。ただ、論文のいろはも知らなかったのだから、最初の論文は「これは随筆である」と学会からぱっと返されました。論文を出してから1年半くらいしてからコツがわかって論文が通り始める訳ですよ。国立公園協会からも3年間助成金をもらうことができ、その次の年は大成建設の自然・歴史環境基金からももらうことができました。岡山に5年間いましたが、1年目は座っていて、2年目から4年間で日本造園学会への論文を徐々にまとめることができました。だんだん元気になってきて仕事も増えてきた時、職場の人事担当者から異動の希望を聞かれました。ちょうど研究が佳境に差し掛かっていたので、母校に近い京都御苑管理事務所に希望を出して京都御苑管理事務所の庭園科長ということで異動しました。京都で論文の4本目、5本目を完成して京都に来て2年目でまとめた論文が5本になったので母校の京都大学に行きました。そうすると、昔僕が学生だった時は助教授だった吉田博宣氏が教授になっていて、「5本も通しているなら後はまとめなさい」と博士論文審査を快諾してくれました。話をしに行ったのが6月くらいで10月にはもう教授会にかかり、全員賛成で博士号を取得できました。

岡山で社会復帰して、たまたま瀬戸内海と巡り会ったことはラッキーなんですね。瀬戸内海というのは日本人、異人の資料がいっぱいあって、こんなに資料のあるところは他にはありません。富士山や日光はたくさんあるだろうけど、ただ富士山なんていうのは見方が非常に単純で、風景観の変遷とか、風景の見方が変わるとかいうのはなかなか出てこないだろうと思います。ところが、瀬戸内海ははっきりしているんですよ。昔の歌枕とか神社仏閣とか伝説の地とか名所を一生懸命見ていたものが、急に自然美、内海多島海とか、あるいは段々畑みたいな人文景観とか、大きく転換していくのが非常に読み取れます。それはラッキーだったんですね。どのフィールドにぶつかるか、研究者というのは宝の山を掘り当てたら上手くいくけど、そうでなかったらなかなか成果が出てきません。あと、ここにきて京都大学との関係が非常にスムーズにいったということですね。僕の場合は、

いろいろな幸運が上手く作用したということだと思います。

次の人事異動について話が出始めた頃、この体だからあちこち飛び回るといのがなかなか無理だろうなと思いました。博士号もとれたから、すぐにでも大学の口があるんじゃないかと考えていましたが、簡単にはありませんでした。ところが、たまたま大学の先輩が奈良県立大学の教授をされていて、別の大学に異動になり後釜を探していて声を掛けてくれたのです。奈良県立大学は当時夜間大学で、昼間ゆっくり研究ができてよいと思い、それは二つ返事で「はい、僕でよければ」と返事をして、大学への転職ができました。京都御苑の勤務は5年間でした。環境庁に居づらくなっている時にちょうど話がきたということです。

■西田様は、風景論を深く探求され、「瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ—」(中公新書)をはじめ多くの著書を著されています。西田様の風景論について、簡単に教えてください。

風景論は最近はっきり言い出したけれども、景観論が一般的だった時代に風景という言葉は学論的にはなかなか使いにくい言葉でした。僕が関心を持ったのは、人間の見方は時代とともに変わるということなんです。ある時代はこういう風景を評価して、またある時代は別の風景を評価するということです。今も農業景観とか台頭してきていますが、刻々と変わっています。環境は変わらなくても人間が注視する風景が変わっていくのです。それは主観性の問題で、そういう人間の主観性について調べて、風景の見方がどう変わるか、風景評価の変遷をきちっとおさえたいと考えました。最初はそんなはっきり理由がわからなかったけど、調べているとどうも昔見ていた風景と今見ているのと違うなというのが徐々にわかってきました。つまり、風景評価というのは時代で変わることがわかってきたのです。近代は科学的自然観・科学的風景観の見方だというのは造園学でも教えられてきたけれど、それをもっと具体的な事例で、じゃあ科学的自然観の前は一体何だったのかとか、そういうことをきちっと調べるというのが僕の風景論なんです。つまり風景評価の変遷を人間の側に立って調べること、人間はどういうふうに環境を認識するのかを調べること。そして、瀬戸内海という場所で宝の山に巡り会って僕の見方が確固としたものになりました。同じ場所を見ているも昔の人の見方と今の人の見方が違うのかというのは僕自身もはっきり言い切れる自信はありませんでした。かつての人の見方と同じ場所に立って、現代人が見た時の見え方が違うことが言えるのだろうか。ところがそういうのを解いてくれるのはやっぱりいろんな文献、他の研究なんですね。ヨーロッパのアルプスの見方が、醜い山から美しい山に変わったという研究があって、それを非常に詳しく書いている文献をようやく探し当てて、同じ対象を見ているも見方が違うんだと、その見方というのは単に形とかだけの問題じゃなくて、意味付けとか価値付けが違うことが段々はっきりしてき

ました。昔の人はアルプスは醜い悪魔の棲む山だと意味付け・価値付けていたけど、18世紀後半以降から綺麗な岩山で雪を頂く崇高な美しい山に変わっていきます。つまり、人間の側の意味付け・価値付けが変わる訳ですよ。それを知って、そういう理論を地理学のオギュスタン・ベルクとかがはっきりといろんなところで説いていて、僕の言っていることは間違いじゃないとようやく裏付けがとれたというか、支えができたというか自信が持てました。

瀬戸内海を調べていても、見方が変わっているということははっきり言えるし、あとは僕が研究すべきは何から何に変わっていったのかとか、さらに何故変わっていったのかということです。単純に近代西洋文明が入ってきただけでなく、もっと社会的・文化的な背景があるんじゃないか。ひょっとしたら経済的な背景も関わっているかもしれないし、そういう社会的条件とかいうのは、今後の課題ですが、きっとこれからの世代が研究してくれるでしょう。とりあえず、僕の風景論というのは、人間の側に立って風景評価の変遷をきちっとおさえるということだったのです。

■瀬戸内海の発見を出版された際の思い出についてお話しください。

1996年に45歳で博士号をとり、『瀬戸内海の発見』が出版されるのは、その3年後の1999年です。これは、白幡洋三郎氏が当時『旅行ノススメ』という書籍を中公新書で書いていて、その関係で出版社に推薦してくれたのが発端です。その前に、僕は岡山文庫で出版した経験があったので本を出すのはそんなに難しいと思っていませんでしたが、修正とか校正にもすごく時間がかかりました。今は如何に出版が難しいのかを身に染みて理解していますが、それでも当時は比較的スムーズに出版することができました。

『瀬戸内海の発見』は割合に反響があり、瀬戸内海沿岸の新聞社が、瀬戸内海の風景の歴史をここまで細かく調べたと絶賛してくれました。知らない評論家が小さく取り上げてくれたこともありました。当時は非常に絶好調というか意気揚々としていて、自分はどんどんこれからも発展していけると思っていました。この本が出た時には奈良県立大学への転職が決まっていた、この本が出て大学側も驚いていました。

『瀬戸内海の発見』は、当時、駅の書店にも並べられていて、ベネッセの当時の社長が東京から岡山に戻ろうとした時に、駅で見つけて買ったらしいのです。社長の福武総一郎氏は、当時、クルージングに凝っていて、瀬戸内海が大好きなんですよ。彼は東京で働いていましたが、東京は何て非人間的な場所なんだと、彼はそういう思いを抱いていたようです。僕の本は、たまたまベネッセをべた褒めしていましたが、それは素直な本心からでした。国立公園にベネッセハウスというホテル兼美術館や児童教育を目的としたキャンプ場ができたので、僕は子どもを連れてキャンプ場に遊びに行ったりしていました。ベネッセハウスは開口部の広い窓に瀬戸内海が望めて、そこを船がゆっくり横切っていく風景

にすごく感動しました。穏やかな海にゆったりした時間が流れている。時間というのは難しいですけど、動きがスローだということは、ゆったりした時間なんですよ。やっぱりこういう世界は人間にとってはとても必要だし、これは瀬戸内海だからできることなんだと思いました。安藤忠雄氏と福武總一郎氏もきっとその辺りを狙っているんだろうと思いました。だからこの本にちらっと、こここそ近代文明を見直す場所だと、我々はなんて壮大な都市文明・物質文明を築いてあくせく働いてきたことかと、こういうところでこそ人間性を回復すべきだといったことを書いたのです。それが福武社長の思いと同じだったんですね。福武社長はその後あそこを現代アートの殿堂にしていきます。地中美術館をつくり、李禹煥美術館をつくり、それも結局人間が忘れ去った精神的なもの現代社会が失ってきたものを、ここでは見つめ直すことができるし取り戻すことができると福武社長はそう思ったのでしょう。それは僕の思いと非常に一致して共鳴するものがありました。ベネッセの財団 15 周年記念の基調講演に僕を呼んでくれたり、福武財団が行う瀬戸内海の研究活動支援の選考委員に選ばれたり、10 年間くらいお付き合いをさせて頂きました。

僕は現代アートの力っていうのはすごいと思っていて、現代アートをいち早く褒めた福武社長はまさに審美眼というか独特の哲学を持って、そういうものを非常に尊重する人です。それは非常に共鳴して共感しました。歳が僕より 4 つくらい上で同世代だったこともあり、わかり合えたということなんじゃないかな。それは『瀬戸内海の発見』のお蔭です。

■今後の研究や著作活動に向けた意気込みをお聞かせください。

47 都道府県別に公園・庭園を紹介した本が上手くいけば来年出版できると思います。自然公園と都市公園と日本庭園の 3 つのパートに分かれて、僕は総論を書いています。また、自然公園も執筆しています。

今、都市公園もどんどん変貌していて、緑地が徐々に侵食され始めています。京都御苑も同じで、緑地なんていっぱいあるから迎賓館くらいいいじゃないかといわれ、緑が壊されました。近年、都市公園は急激に面積を増やしましたが、今や建築物の草刈り場になっています。自然公園も 2010 年の総点検以降、生物多様性保全が主流となり、例えば沖縄や奄美を世界自然遺産にするために国立公園に指定するというふうになんて変わっています。自然公園は割合資料があり、自分も大抵知っているから書くことはできます。ところが都市公園の方は日比谷公園とか明治神宮とか主なものはあるけれど、他はないから都市公園の執筆は苦勞されるのではないかと危惧しています。

もう一つは、国立公園史の本を出版することです。国立公園史は田村剛や田中正大、丸山宏や堀繁の各氏の立派な著作がありますが、まだまだ書籍や論文にされていないことがいっぱいあって、それを知り合いの若手の研究者がどんどん掘り起こしています。せっかく新しいことが発掘されてきているのだから、やっぱり本できちっと体系的にまとめたい

と思い、出版社と掛け合って何とか出版しようと奔走しているところです。

他にも、瀬戸内海環境保全協会が発行している雑誌瀬戸内海で、「描かれた瀬戸内海」というのを連載で21回まとめたものが何とか本にならないかと思っています。いずれも見果てぬ夢かもしれませんね。

■京都御苑にまつわる西田様の思い出を教えてください。

いっぱいあります。僕が京都御苑に来たのは1995年の4月で、5年間いた訳です。1995年というのは、その年の1月に阪神淡路大震災があって、3月に霞ヶ関でサリン事件が発生しました。京都御苑に来たら、災害に強い公園づくりを進めようという話が一気に起きて、京都御苑も広域避難場所なので災害に強いところにする事になりました。トイレがいつでも使える、電気が消えない、水がいつでも使える、みんなが避難できるような施設整備をすることになりました。出水の広場の下には防火水槽をつくり、井戸も自家用発電機をつけて常時使えるようにし、トイレにも流せるようにしました。御門とその渡り石が潰れたら人も車両も御苑に入って来られないから、御門の修理と渡り石の取り替えをすることになりました。御門の修理は難しいから結局は腐っているところを替えたのですが、しかし、蛤御門なんかでも修理し終わったら鳩が留まらないように釘がいっぱい出ているので、今はもうなじんでいるけど当時はぴかぴか光っているので、えらいことやったなあと思いました。瓦の修理も伝統的建築物の専門家にきてもらいいろいろ学びました。瓦なんかもできるだけ今あるものを残して、本当に悪いところだけ替えていくことが大切で、材料も同じものを使いました。何年間か防災公園づくりにかかりっきりでしたね。

それが終わる頃に迎賓館問題が起こる訳です。迎賓館は運動場の場所に建てることになっていたため、その代替施設として閑院宮邸跡に運動場をつくる計画になっていました。ところが、閑院宮邸跡は残すべきだということになり、新たな運動場建設に動きました。位置の選定、アセスメントの実施などを行い、既存運動場横に最大限の緑を残すように慎重に配置しました。また迎賓館の樹木移植の場所選定を決める必要があって、それなりに忙しかった思い出があります。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

強いて言えば、建礼門前大通を南から見る眺望でしょうか。我が国にはないあの広さとあの直線、あれはそれなりにすごいなあと思います。圧倒されます。高倉橋のところで設計当初は丸太町通に突き抜けることを考えていたらしいけれど、結局堺町御門の方向に曲げているところを見ると、やっぱり日本人はビスタというか直線をあまり好まないのですね。

ようね。昔の人は儀式の場のために、あの道をああいう形につくりだしてきたのだと思うと、他にはない空間ということで圧倒されます。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由にお聞かせください。

これはなかなか正直言って難しいというか、ここは先人たちがものすごい苦勞をしてつくり上げてきた場所です。戦後、畑に耕され、風致を守るという根幹を壊さずに市民が親しんでくれるように上手くつくってきました。ここは先人がその時その時に苦勞しながらやってきたのだらうと思えます。児童公園とか見えないところにつくって来たし、その後運動公園とかも市民に開放するために御所の風致に影響の少ないところに上手くつくって来ました。

環境省時代も出水の小川（親水公園）とか母と子の森とか、そういう自然とのふれあい施設を上手くつくって来ました。ハレの問題、ケの問題、御所の問題、市民の問題、それを上手く共存させてこの伝統を引き継いでいくというのがこの使命なんだらうと思いません。純粋に都市公園みたいに親しんでいる人もいますが、都市公園というふうに見たら決して 100 点ではありません。しかし、御所の風致を守る京都の緑地として存続させる、これは非常に重要で、先人たちはそれを損ねることなくやって来ました。環境省の自然とのふれあい、生物多様性の保全、そういうことも折り込みながら上手くやって来ました。それを今後も、御所の風致を守り、元公家屋敷であった跡の雰囲気も残し、市民の憩いの場であることも共存させる。環境省の行政目的である自然とのふれあい、生物多様性の保全も遂行する。これがこの広大な緑地に課せられた使命だらうし、先人の努力を我々も引き継いでいかなければならないだらうと思えます。

2016 年 11 月 17 日 インタビュー

聞き手：田村省二、山本昌世

○西田 正憲さま プロフィール○

1951 年、京都府生まれ。京都大学農学部林学科卒業（造園学専攻）、同大学院修士課程修了後、75 年、環境庁（現環境省）入庁。北海道、山陰、東京、九州、山陽、京都に勤務し、全国の国立公園の管理に従事。81 年には米国内務省国立公園局・ミシガン大学主催の国立公園等自然保護区国際セミナーに参加。88 年、阿蘇くじゅう国立公園在任中に発病、2 年間入院し、90 年、岡山で社会復帰。その後、研究に打ち込み、96 年、瀬戸内

海の風景論で農学博士（京都大学）。98年、田村賞（国立公園の父田村剛にちなむ賞）受賞。99年、日本造園学会賞（研究論文部門）受賞。2013年、日本造園学会特別賞（著作出版業績）受賞。2000年から2016年まで、奈良県立大学地域創造学部教授、附属図書館長、学生部長、学部長を歴任。専門は景観論、環境文化論、自然観光論。技術士（環境）。著書に『瀬戸内海の発見』（中央公論新社）、『自然の風景論』（清水弘文堂書房）、共著に『ランドスケープ空間の諸相』（角川書店）、『瀬戸内国際芸術祭2010』（美術出版社）などがある。